
ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

ジュラルミンダンボール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

【Nコード】

N1204T

【作者名】

ジュラルミンダンボール

【あらすじ】

ハローハロー人類諸君。SEEDが消え去ってメダシメダシつてならなくて残念だったね人類諸君。ところで人類諸君。完全に人の形をして、人のように感情を持ち、人に紛れて人のように暮らすSEEDがもしも居たとしたら人類諸君。人類諸君は、どうするね？

第一話「死にたいわけじゃない。」（前書き）

やっちまった！　なんてこったい！　まあ良いか。そういうワケでまさかの連載二本目投下です。ファンタシースターポータブル2の主人公がもしも×××××だったら？　という内容のお話です。とりあえず主人公のプロフを。

名前：リア・ゲート

性別：女性

種族：ヒューマン（？）

年齢：27歳

身長：174Rp

体重：62Kv

タイプ：レンジャー

服装：上下共にストーリアの黒黒

その他：髪は少し短め。肌が色素が無いかのように白い。瞳は黄色と言うより金色で、白目が黒い。左目を眼帯のようなヘッドマウン
トディスプレイで隠している。

程よい大きさと良好な形をしている。

第一話「死にたいわけじゃない。」

「あらあら、随分と人が多いのねぇ。」

海底レリクスにて。実力さえあれば誰でも可との事だったので来てしまった。面接の後の抜き打ちテストという名の不意打ちに手荒く対処してしまい、随分とひどい怪我をさせてしまったのが悔やまれる。とりあえずは狙い通りに、簡易携帯食の配給が配られる。

適当な場所に腰掛けて配給を食べていると、不意に声を掛けられる。そこそこ身長の高い、男性型のキャストのようだ。

「よう。所属無しって事はフリーか？」

「ええ、まあ。」

「そうか。それは大したモンだ。場所が場所っただけに腕利きを集めているのかもしれない。」

「そうですねえ。このレリクスは最近見付かったモノ、だそうですね？」

「ああ。発見されたのはごく最近で、この辺りまでは安全なようだが、奥は正に未開の地ってワケよ。久しぶりに儲けが出そうだな。」

「ん、でも人数が人数だし、山分けてなると少し心配ですねえ。何人が殺しておいた方が・・・」

「おいおい、冗談でもそれは止めておけよ？　ここは未開のレリクスなんだ、何が出るか分かったモンじゃない。まあ、放っておいても何人が死人も出るんじゃないか？」

といった具合の不謹慎極まりない話題で盛り上がっていると、少し離れた所から高くて幼い感じのする、女の子の声が聞こえてきた。
「帰ろう！　帰ろうって！」

男性キャストが後ろの方で駄々をこねている女の子の方を見る。

「なんだ？　あの子供は？」

「さあ？　^{ヴァージン}実戦未経験にしか見えませんけれど・・・？」

女の子が駄々をこねている相手はそこその体格を持つ、ロング

コートの男性だった。

「うるせえ！ 今からお前向けの仕事を取ってきてやるから、ココを動くんじゃねーぞ？」

そう言つと、男性は女の子を残して行つてしまった。

「あらあら。こんな所に女の子で一人にするなんて。」

「確かに、あまり気分の良い光景では無いな。まあ、不謹慎極まりない話をしていた我々にどうこう言える話では無いかもしれんが。」

と、その時。突然大きな地震が起こる。そして出入り口が徐々に閉まつていく。私と男性キャストは出入り口に近い場所に居た。しかし女の子は大分遠い場所に居る。しかもあるう事が頭を抱えて座り込んでいる。これはマズイと思い、女の子に駆け寄つて肩に担ぎ上げて走る。

「ふえ！？ ちょ、あの！」

「あ、暴れないで！ って、うわあ！？」

女の子が暴れた拍子に床のデコボコに躓いて転んでしまった。お陰で扉が閉まるまでに外に出る事が出来なかった。むっくりと起き上がりながら女の子に話しかける。

「いったゝい・・・なんで暴れたの？」

「だ、だつて・・・」

そう言つて顔を赤くしながらもじもじと裾の方を若干引つ張っている。

あ、なるほど。そういえば慌ててたせいで担ぎやすさ重視のお尻が前に来るスタイルで担いでいた。これはつまり、扉の辺りに居た人達から見れば「おパンツですよ！ 少女のおパンツですよ！」と言わんばかりのスタイルになってしまっていたわけだ。

淑女たるものそこまでキツチリ考えて動かないとね。いやあ反省反省。

「あらあら、ごめんなさいね？」 あ、私はリア・ゲート。あなたのお名前は？」

「え、エミリア。エミリア・パーシバル。って言うか、今のこの状

況って・・・」

「ええ。閉じ込められちゃったって状況ね。まあ扉は開かないモノと割り切りましょう。」

「割り切って・・・で、どうするの？」

お尻を無意識にぱんぱんとはたきながら立ち上がり、言った。

「先に進んでみましょう？　もしかしたら、別の出口から出られるかもしれないもの。」

「え、ええ！？　先に進むの！？　あ、危なくない？」

「ん、そうねえ。きつと危ないでしょうねえ。ま、でも、死んでしまったその時はその時、所詮はそこまでの命だったって事で、良いんじゃないかしら？　それに・・・」

そこまで言って、愛銃のショットガン、違法改造が施されたシツガ・デスタをナノトランスさせて手元に呼び出し、それを右手だけで持ってエミリアの頭に突き付ける。

「伏せなさい！」

「ひうつ！？」

エミリアが頭を下げると同時に引き金を引く。後ろに居たエビルシャークの上半身がアゴと腕の残りを残してバラバラに吹き飛ぶ。

撃った反動を利用して銃を手元に引き寄せて左手でポンプアクションを行い、エミリアが居る側の反対から、私目掛けて飛び掛ってきたエビルシャークに向かって再び発砲する。

上半身と下半身が強力な力で無理矢理捻じ切られたソフトビニール人形のようにいびつに千切れて分かれ、吹き飛ぶ。

「す、す・・・。」

「ここはもう安全地帯じゃ無いのよ？　ここに留まっていると、こういう品の無い方々がわざわざ来る可能性も高いの。だから少なくとも、移動は行うべきだと思うわよ？」

「う、うん。分かった。って言うか、あんたと一緒に居る事にするから！」

「あら？」

「だって、あんたと一緒なら何とかかなりそうだし！」
「あらあら」。それじゃ、張り切って行きましょうか。」

「ん、多いわね。ちよつと疲れて来ちゃったわ。この子もそろそろメンテナンスしたいし・・・。」

連続で既に50体近くを討伐している。いい加減に疲れて来だし、それにシッガ・デスタの銃身も焼けて来た。そろそろメンテナンスが必要そうだ。

と、エミリアが不思議そうな顔で質問をしてくる。

「あれ、シッガ・デスタ・・・っていうかテノラの製品って耐久力が高い事がウリじゃなかったっけ？」

「あらあらよく知ってるのね？ そうなのだけど、この子は私がアレンジを加えてあげた特製だから、耐久力が著しく低くなっちゃってるのよ。その代わり、普通のシッガ・デスタなら片手撃ちなんてしたら肩が外れちゃうけど、この子なら多少は平気だし、破壊力は・・・まあお察しの通り高いしね。」

「ふん。ねえねえ、ちよつと貸して？」

「良いわよ。はい、どうぞ。」

周囲に目を軽く走らせながらエミリアに渡す。

手に取り、隅々まで観察するエミリア。その眼はまるで、他社の武装の研究を行っている技術者のように鋭くそれでいて好奇心に溢れている。

「ふん、なるほどなるほど。緩衝装置の全長を伸ばして反動を小さくしつつ、広がったリアクターのスペースにもう一つ、ハンドガン系のリアクターを積んだのね。どうりで長く見えたワケだ。なるほど、これなら威力も上がるし反動も小さくなるね。でもコレ、作りが荒いよ。これじゃあ折角のフレーム剛性が台無しじゃない？」

それに、この銃身材って軽さを基準に選んだでしょ？ これって熱

に弱いから銃身材には向いてないよ？」

それを聞いて悔しさ半分に少しイジワルを言う。

「あらあら」。じゃあ今度、エミリアに改良をお願いしようかしら
」？」

「え、あ、いや！ 無理無理！ あたしのは知ったかだし！」

無理！ 絶対無理！ と連呼しながら私にシツガ・デスタを返そうとこちらに来るエミリア。と、ここでエミリアを左手で突き飛ばして半歩下がる。私が居た所とエミリアが居たところの丁度重なる辺りに、亀のような形の変な外見のスタティリアの一種がこちらに向けて砲弾のような物を撃ってきた所だった。

私は仕方なく右手を変化させてブリンガーライフルにして構え、撃ちこむ。しかし射撃に耐性があるらしく、効果は薄そうだ。しかし、それでも数を撃ち込めば話は別だ。無数の黒いエネルギー弾にとうとう装甲を貫かれ、蜂の巣になるスタティリア。尻餅を付いているエミリアに駆け寄って声を掛ける。

「大丈夫だった？」

「う、うん。平気だけど、その銃は？ 今、ナノトランスしないで出したように見えただけ・・・？」

「え？ あ、いやあ気のせいじゃないかしら？ ちゃんとナノトランスしたわよ？」

「いや、でもこう、ニュツって・・・」

「いやいやいやいや、気のせいよ気のせい！ さ、早く立って！
行きましよう？」

「それにしても、なんでレリクスなんてあるのかしらねえ？ ねえ
エミリア？」

話が途切れたので苦し紛れに強引にエミリアに話を振る。

「うーん、それには諸説あるらしいんだよね。ともかく旧文明が存

在してた事は間違い無いとして、何故旧文明人はどうしてレリクスみたいな建造物を作ったのか、なんだけど・・・旧文明人が生きた時代にもSEEDの襲来があつて、身を守る為に建造したっていう説が多分一番代表的なんじゃないかな。確かにこの説は信憑性が高いんだけど、でも矛盾点もあるんだよね。まず第一に、既にSEEDは封印されて全滅してるハズなのに、何故こうして新たに起動したレリクスが有るのかつて事。次に、対SEEDの為ならどうしてSEEDの襲来と共に一斉に起動しなかったのか。有る程度の間を置いて、それぞれがそれぞれのトリガーに合わせて順次起動していったとすると、単純に対SEED用とは考え難いんだよね。他にも、色々あつて・・・あ。」

私がポカンとして聞き入っている事に気付き。硬直するエミリア。私はそんなエミリアを目を丸くして見つめながら、素直な感想を述べる。

「詳しいのね。びつくりしたわ・・・。」

エミリアが若干慌てた表情で言う。

「え！？ あ、いや、常識よ、常識！ 傭兵ならこの位知つて当たり前なの！」

「あらあら、じゃあ私は二ワ力なのかしら？」

「う、ううう・・・。」

エミリアが不機嫌そうな顔をする。

「も、もう！ ほら、さつさで行こう！ 早く出口見つけて、早く外に出て、早くあのおっさんに文句言いまくつてやるんだから！」

「おっさん？ って、あのロングコートの方？」

「あれ、知ってるの？」

「うーん、詳しくは分からないわ。エミリアが駄々をこねていた相手でしょう？ その程度。」

「え、まさかさっきの見た？」

「ええ、ばつちり。「いやだ、帰りたいよー！」って駄々をこねている所の一部始終。」

ほぼ完璧な声真似に自画自賛したくなる気持ちを乗せてエミリアにどや顔を見せ付ける。何故か少し落ち込んだ表情をするエミリア。表情豊かでカワイイ子ねえ。

「うう、見られてたんだ・・・あのおっさん、あたしが働かないからって無理矢理軍事会社なんかに入れて、しかもいきなりこんなレリクスにほっぽって！ あゝ、もう！ 何かむしように腹が立ってきた！ ねえ、こんなか弱い女の子をレリクスに放り出すなんて酷いと思わない？」

「そうね、確かにちよつと厳しいわね。」

「そうだよな！ そりゃああたしも仕事を選び好みして全然やらなかったけど、これは流石に酷いよね！」

「ん、選り好みするのはともかく、全然働かないのは問題じゃないかしら？」

「え？ 何、もしかしてあんたもおっさんの味方？」

「そんな事は無いわよ？ ただ、ちよつとエミリアに同情の余地が少ない気がしただけ。まあ、ここから脱出して、言いただけ文句を言えば良いんじゃないかしら？」

「ぶ、なんか誤魔化された気がする！ ま、それもそうだよな。よゝつし、絶対にこつから脱出するぞー！ おー！・・・って事で、よろしく！」

「・・・あんまり、人に頼り過ぎるのは良くないと思うわよ？」

「ここは・・・」

大きな通路のようなスペースに出た。両側にはズラリと大きな騎士のような形の物体が。何だか微妙に荘厳な雰囲気思わず立ち止まってしまう。

「こ、これ全部、人型の大型機動兵器だよ？ タダでさえコツチ見えて怖いのに、動き出したらって考えると・・・うう、早く行こう

よ……。」

エミリアが後ろに隠れるようにすがり付いてくる。背後のエミリアを見て、思わず顔が綻んでしまった。

もし、自分にこの位の子供が自分に居たらきつとこんな感じなんだろうな、なんて考えてしまつて。

と、エミリアの側からは反対側、私から見れば前の方から大きな駆動音がした。振り向くと、こちらを向いて武器を片手に吼えている。威嚇のつもりだろうか。エミリアが慌てた声で言う。

「ちょ、ちよつとちよつと！ 言つたそばから動き出さないでよ！」

私は左腕でエミリアを制する形を取り、エミリアに言う。

「少し下がつてなさい。」

「え！？ む、無茶だよ！ あんなデツカイの相手に一人なんて！」

エミリアの方に目を向け、少し強く言う。

「じゃあ、手伝つてくれるの？ いえ、あなたに私を手伝える？」

「う、そ、それは……」

「なら下がつて。大丈夫、あの程度ならいくら出て来ても負けないわよ。」

エミリアが悔しそうに唸り、そして言う。

「わ、分かつたわよ！ あんたのその大丈夫って言葉、信じるからね！」

「ええ、信じて待つて。」

そう言つて、目の前まで近付いていた巨体の機械騎士と対峙する。

大斧を横に構える。それを見て高くジャンプする。足元を一撃必殺の破壊が通り過ぎる。私は空中で機械騎士の頭にショットガンの照準を合わせ、抜群の破壊力を持つ銃弾を撃ちこむ。しかし、

「あらあら、硬い子ね？」

確かに少しだけ装甲が剥げた。しかし停止にはほど遠い。これは装甲部分に撃ちこんでも大したダメージにはなりそうもない。それならと着地と同時に横っ飛びに斧の大きな縦振りをかわして脇腹辺

しかし、私は倒れない。それ所か、血の一滴すら出ない。削がれ、宙を舞った左側頭部がべちゃりと汚らしい音を立てて地面に落着し、その場で黒い粒子となって霧散する。

それは撃破されたSEEDフォームのそれと良く似ていた。

私の中から、今まで私の形として丸め込んでいた物が、黒い液体のように左側頭部から溢れ出す。

それは私の左半身、特に左腕を瞬く間に覆い、影のようにも見え、真つ黒いそれは瞬く間に大きくなり、それらを螺旋状に隠すようにして、緑色の点滅する点が規則正しく並ぶ紫色の帯のような物が覆い、それは最終的に太く、禍々しい、巨大な蔓とその先端に蕾のような形の膨らみのある触手のような物となった。

私はそれを大きく振り、真横から機械騎士に叩き付ける。機械騎士は上半身だけがちぎれるようにして壁に叩き付けられ、粉碎し、その場には支えるべき上半身を失った下半身だけが残っていた。

エミリアが驚愕と恐怖を顔いっぱいに表示した表情でこちらを見る。私は左腕の触手を大きく振るう。エミリアが体を小さくするが、勿論エミリアを狙ってはいない。

エミリアを後ろから狙っていたやつを叩き潰したのだ。エミリアが恐る恐ると言った感じで顔を上げ、そしてこちらを見ると同時に叫ぶ。

「う、後ろお！……！」

その瞬間、後ろを振り返るが間に合わず、胸に深々と大斧が抉りこみ、地面に叩き付けられてから完全に背中に通す。その後もう一機が現れ、二機で私をメチャクチャに叩き潰しまくる。末端が幾ら破壊されても平気とはいえ、そのメチャクチャな斧の中には核に致命傷を与えるような一撃も当然のようにあったワケで、私の意識が段々と薄れていく。

私が動かなくなったのを確認したのか、二機の機械騎士はエミリアにゆつくりと歩を進める。私はギリギリで動く首でエミリアの方を見る。

エミリアの後方からはさらにもう一機が近付いている。私は渾身の力を振り絞り、体の大きく開いた傷口から左腕と同様の触手、しかしサイズは少し劣る触手を十本ほど飛び出させて私をメチャクチャに叩き潰した二機を突き刺し、完全に破壊する。しかしそこで力尽きてしまう。体から飛び出させた触手が黒い粒子となつて霧散する。私は薄れていく意識の中で必死に口を動かす。しかし動いてるかどうかも分からないし、そもそも声が出ていない気さえする。目も一応開けているつもりだが、他人から見れば閉じているかもしれない。

私の口の動きに気付いたのか、それとも本能かは分からないが、エミリアが私に走り寄る音が聞こえる。そして何か・・・恐らくはエミリアに揺さぶられる。一揺れ、二揺れと段々と意識が薄くなっていく。

「どうして・・・どうしてあたしなんか庇つて・・・ねえ、ねえ起きて、起きてよ！ どうして・・・？ どうしてみんなあたしを置いてっちゃうの・・・？ お願いだから、目を開けてよぉ・・・あたしを・・・一人にしないでよぉ！！」

その瞬間、不思議な物を見たような気がした。エミリアの顔に浮かぶ回路のようなオレンジ色の線、エミリアの背後に浮かぶ円のような物。そして・・・

「あなたを・・・死なせはしません！」
・・・
女神？

第一話「死にたいわけじゃない。」（後書き）

はい、ようやくとブログ終了です！ 長いね！ まあ原作がこうだから仕方ない！ で、ネタばらしをしますと、主人公は元人間の人型SEEDです。まあ過去のお話とかは次回があれば追々という事で。ではでは。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」（前書き）

リアちゃんの口調が乱れますが、仕様です。ええ、仕様ですとも。
では第二話、ごゆっくりとお楽しみくださいな。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」

「・・・ん・・・」

なんだか妙に眩しい。なんだ、地獄っていうのも案外にも明るい物なんだなあ。そう思いながら目を開ける。

目の前にグラマラスなスタイル抜群のひ・・・キャストが居た。

「アラ、おつきしたネエ。チョット待つててネ？」

そう言つてキャストの女性が奥の方を向いて誰かを大きな声で呼んでいる。

私はその間、周囲を見渡す。派手さの無い質素な、良くある作りの、随分と小綺麗な・・・事務所？ 何か。何より地獄の割りに明るいいし、天国に私が来れるとは到底思えない。

と、言う事は・・・生きてる？ いや、それは考え辛い。だつてあの時、私は核に致命的なダメージを受けたし、そうじゃ無くても形状を保存しておけない程までに全身にダメージを受けていた。「中身」丸出しならいくらでも生きていられるけれど、それにしてはキャストの対応が普通過ぎる。

人類種の天敵を目の前にしたら普通はもう少し慌てたりしそうなモノだけど。と、言う事は姿形に関してはちゃんと人間のフリがでキテル？ それにしてもミシなオイしソウ・・・

ハッと気付いて左目を押さえる。眼帯、もといヘッドマウントディスプレイが無い。慌ててタオルをナノトランスさせて取り出し、左目が隠れるように押さえ、簡単な眼帯の代わりにする。

応急処置だが仕方が無い。後でどうにかしてライアさんに連絡を取つてまた作つてもらふとしよう。頭の後ろでしっかりと縛り、ズレない事を確認すると近付いてくる足音に気が付く。

「よう。ようやくお目覚めか？」

「あ、はい。お陰さまで。」

そう言つて声を掛けて来た男の方を見る。背の高いビースト。色

のセンスがイマイチなロングコート。ボサボサの髪とヒゲのせいで、顔が鼻と頬ぐらいしか見えていない。

胸元を大きく開けており、そこにはぶ厚い胸板が。少しむさ過ぎる。年も相当行ってそうだし、あまりタイプじゃないかな。オイシソウダケド。

「？ どうした、そんなにジロジロ見て？」

「い、いえ。何でも・・・あ、それより女の子を知りませんか？」

「あ？ 女の子だあ？」

「こつ、金髪で、赤い目の・・・」

「金髪で赤い目？ あゝ、アイツか。今呼んだ所だ。そろそろ来んだろ。」

と、後ろのドアが開いた音がした。それと同時に何だか落ち込んだような女の子の声が聞こえてきた。

「うゝ、おっさん、今日くらいはかんべんしてよねゝ・・・。あたしがどんな目にあつたか知ってるでしょゝ・・・。」

「知らねーし、興味もねーからかんべんしねーよ。ったく、客の前でそんな顔すんじゃないよ、みつともねえ。」

女の子が不満そうな顔でおっさんと呼んだビーストの男を軽く睨んでからこちらを向く。

「えっと、初めまして。って、どつかで会つたような・・・？」

その女の子を見て、私も驚く。

「エミリア・・・！ 良かったゝ、無事だったのねゝ？」

「あ、あんた・・・どうして生きてるの！？ ねえ、何で！？ 何で、おっさん！？」

「あら心外。何だか生きてちゃいけないみたいな言い方ねゝ。」

「人を勝手に殺してんじゃないやねーよバカ！」

おっさんに罵られても特に意に介する風も無く、

「良かったゝ、ホントに良かったゝ。アレで死なれてたら一生モンのトラウマだよゝ。良かったゝ。そうだよね、あそこで起きた事って全部夢だったんだよね、良かったゝ・・・。」

何度も「良かった」を繰り返して安堵するエミリアそれを見ておっさんが小声で

「よしよし、狙い通りエミリアも良い感じに懐いてるな・・・」
と言った後、こちらを向いて手を肩に掛けて少し顔を近づけて言う。お酒臭い。

「お前さん、フリーなんだろ？ 丁度良い、このままウチの会社に入っちまえ。今なら住む場所と居ないよりはマシ程度のパートナーも付けてやるぜ？ どうせ身寄りもねーんだろ？ ウチは働きの良い社員にはボーナスもはずむぜ？ どうだ、このご時世乗らねー手はねーだろ？」

「へー、パートナーまで付けるなんておっさんも珍しく太っ腹だね。」

意外な一面を垣間見て関心したような表情のエミリアに、おっさんが肩越しに呆れたような目線を投げ付ける。

「何他人事みたいな顔してんだ。お前の事に決まってるんだろ。」

そう言うと共にこちらに向き直り、口角を少し引き上げて若干黄ばんだ歯を見せながら私に聞いてくる。

「で、どうする？」

「ちよ、おっさん！ あたしにも選ぶ権利を・・・」

「義務も果たせねーようなバカに権利なんざねーんだよ！ で、どうする？」

正直、かなり悩む。確かに一人で動くのはいい加減にキツくなってきた。常に食べ物に困る生活はもう嫌だ。

しかし真正正銘の「おばけ」が果たしてヒトの集団の中で生きられるのだろうか？ 正直、正体を明かさずに輪に入って正体を明かした時の反動が怖いし、それならばと正体を明かしても、当然の如くに弾かれるのがオチだ。なら、やっぱり・・・

「ええと、嬉しいんですけど、お断りさせて・・・」

「おおそうか。いや、しかしな。ウチも慈善事業をやってるわけじゃないんだ。」

「へ？」

電卓をポケットから取り出して、何やらポチポチと打ち込み始める。

「ええと？　ココまで運ぶ運搬代金と、メディカルチェックの費用、そんで起きるまでの護衛代金、コイツに人件費と燃料代と手数料を併せると・・・ま、ざっとこんなモンだな。」

電卓を突きつけてくる。と、それを見た時に、やっぱり人類が嫌いになりそうになった。

「ご、五百万メセタって・・・」

「即金で払えるか？」

「これだから人類は・・・（ブツブツ）」

「ああ？　なんか言ったか？　で、払えるのかどうなんだ？」

「払えませんかよー！　こんなの平均的なサラリーマンの年収から税金を引かなかつた額と同じぐらいじゃないですかー！」

「払えねえなあ？　しかし払ってもらわねけりゃコツチも困るんだよねー？」

「ぐぐぐ・・・」

食い殺してやろうか。本気でそう思った。しかし今そんな事をしたら今の今まで平和的に過ごして来たのが全て泡と弾けてしまう。

殺意をグツと飲み込んで、今取れる最善の選択を取る。

「分かりましたよ・・・。」

「よし、決まりだな。既にお前のマイルームは用意してあつから。

おい、エミリア。コイツを部屋まで案内してやれ。」

「なんであたしが・・・」

「何か言ったかゴクツブシ？」

「なんでも無いですー！　はあ。じゃ、あたし居住区の入り口の前に居るから。」

そう言っ出て行くエミリア。

「親子仲、悪いんですねー？」

「はあ？　親子？　誰と誰がだよ？」

「おっさんとエミリア。」

「おっさんってなあお前・・・そっぴや自己紹介して無かつたな。俺はクラウチ・ミユラー。お前は？」

「リア・ゲートです。」

「ワタシはチエルシー！ ヨロシクネ！」

「あ、はい。よろしくお願いします。」

「おうチエルシー、どさくさ紛れに自己紹介たあ流石に抜け目ねえな。で、書類は？」

「モチロン持ってきたヨ」

そう言つてチエルシーが私に書類を差し出す。

「ココと、ココに署名、お願イネ。本人直筆のサインじゃなキヤ無効扱いにされチャウからネ。」

「はい。」

そう言つて指定された場所にサラサラつと書く。本人直筆、かあ。既にリア・ゲートつて名乗つて良いのか分からないぐらいになつちやつてるけど、それでも本人で良いのかな。

そう思いながらも一箇所にも名前を書く。

「はい、できました。」

「ウン、コレでオツケーネ。これカラもヨロシクネ？」

「はい、よろしくおねがいます。」。さてと、それではこれで。」
そう言つてその場を後にする。

「ふあゝあ・・・ねむ。あ、やつと来た！」

「あらあら、待たせちゃつてごめんなさいね？」

「まったくもう！ ま、良いや。とりあえず部屋まで案内するからついて来て？」

そう言つて歩き出すエミリア。レリクスの時もそうだったけれど、

こうして改めてみると本当に普通の子供にしか見えない。そういえばあの女神は一体何だったのだろうか？

思えばかなりキワドイ服装をしていたようにも思える。とはいえ、きつとあのレリクスでの出来事は夢だったのだろう。そうに違いはない。でなければあんなに理想的な死に時がるハズが無い。そんな事を考えていると、エミリアがとある一室のドアを開ける。

「ここが、あんたの部屋。で、あたしの駆け込み部屋！」

「あら、今まで嫌なことがあつたらここに駆け込んだの？」

「ううん、どうせあんた一人でしょ？ 何かあつたら入れさせて貰うから！」

「ええ……。」

別に構わないが、それにしても……。

「本当に普通のお部屋ね……何があるワケでも無いし……むしろ落ち着かないわ。」

「あ、それならインテリアショップに行けば？ テーブルとか箱とか色々あるよ？ 勿論リフォームチケットもね！」

「ん……私、お金が無いのよね……。」

「え？ もしかして……？」

「ええ、一文無し。そもそもあのレリクス調査に参加した目的だつて携帯食料が主な理由だったし……。」

「あ、あはは……フリーの傭兵つてのも大変なんだね……。」

「まあ私の場合、身元が戸籍から出生届から根こそぎ無くなつてるのもお仕事が取れない原因だったりするんだけどね。」

「ふん。」

そうだけ言うと、エミリアが目をショボショボさせながらベッドに腰掛ける。

「あゝ、駄目だ。ホントに眠い……。」

そう言つと共に全身から力が抜けて、糸の切れた人形のようにベッドに倒れこむエミリア。部屋を軽く見回しながらエミリアの傍に腰を掛ける。

フツと思いついて、右手をプリンガーライフルの変異させる。どうやら体の方に異常は無いようだ。右手を戻すと、エミリアの寝顔を軽く観察する。

こうまじまじと見ると、一応は同性の私も少しドキツとしてしまう程度に可愛い。スヤスヤと寝息を立てて、ほんとウに力わいらい。まったくホントウにオイシウ………。

ハツとなって頭を振り、自分の頭の中の思考を掻き消す。とりあえず手元にはまだ300メセタほど残っていた筈だ。飲み物でも買って来て落着こう。

腰を上げてドアから外に出ようとする。その時だった。

「待って。」

後ろから、つい最近聞いた気がする女性の声が聞こえた気がしたのは。

「ここでなら……二人で話が出来そうだから……。」

さっきまでベッドで寝ていたハズのエミリアが、おぼつかない足取りで部屋の真ん中に立っていた。そしていつか見た、あのオレンジ色のような金色のような回路がエミリアの全身に走る。

そしてエミリアの体から出た金色の光が一箇所に集まり、そこに女の人が現れた。

見惚れるほど美しい人だった。

流れるような金色の長い髪。

文句の付けようの無い抜群のスタイル。

その均整の取れたスタイルを見せ付けるかのように露出度の高い服装。

そして優しさを秘めた金色の瞳。

何処を取っても私より女性的で美しい女性だった。

が、何かおかしい。

この人、そこに居ないように見える。

もっとも、物理的にエミリアの体の中にこの身長の人が入っていないわけが無いのだから、立体映像的な何かと考えるのが道理だ

ろう。

生体をナノトランスしたと言うのなら、ハンディサイズのトランスで生き物が生きたままにナノトランスできている事に疑問があるが。

と、その少し変な女性が語り始める。

「私はミカ。訳あってこの子に宿る、意識のみの存在です。この姿も、状態も、すでに失われた古の技術によるもの。失われた技術を旧文明のものと言うのなら、私は「旧文明人」となりますね。」

話がいきなり突拍子も無さ過ぎてどうにも言葉が見付からず、呆然とする。そしてミカが、旧文明に起こったSEEDの襲来と、その旧文明が計画し、実行に移した「復活計画」に関して話し始めた。

大まかに話し終わると、ミカがこちらを見据えて、頭を下げる。

「どうか、この忌わしい計画を阻止するために、手を貸していただけないでしょうか？ この子は・・・心を閉ざしきっていて、私の声を認識してくれないのです。」

「でも、あなただって旧文明人でしょう？ なら、何故阻止しようとするんです？」

「確かに私は旧文明人ですが、現代への回帰を望んではいません。私達は滅ぶべくして滅んだ。世界は次の世代に任せるべきなのです。」

「そう言って一息付いてから、ミカが先ほどまでよりも、より一層深刻な顔をして、語り始める。

「・・・それに、貴方にとっては既に私の存在は他人事ではないのです。・・・何故、縁のないはずの私と貴方が話すことができるのでしょうか・・・？ そしてあのレリクスで自律機動兵器に襲われたのは、本当に夢だったのでしょうか・・・？」

その時点で、嫌な予感が胸を過ぎる。と、確信的な一言を、ミカが言い放つ。

「・・・貴方は、生きていたのでしょっか？」

私はその一言を聞くと同時に、ミカに掴みかかった。しかし実体は無く、手は空を掴むばかりだった。両手を握り、歯を食いしばり、普段では有り得ないほどに語気を荒げる。

「何で私を生き返した！！？ あのまま死ねばようやくこの太陽系から最後のSEEDフォームが消えたハズなのにッ！！！！ あのまま死ねば私はまだリア・ゲートとして死ねたハズなのにッ！！！！ 一人の「人間」として死ねたハズなのに！！！！」

「ッ！」

「どうして・・・どうして私を死なせてくれなかったんだッ！！！！ SEEDフォームなのはアンタだってすぐに分かったハズだ！！！！ 私の身体は・・・私の身体はもう、戻れないんだ・・・。」

「

その場に俯き、へたり込む。歯を食いしばって、拳を握り締めて夢であって欲しかった。あのまま死にたかった。あれ以上の死に時間なんて、もう二度と無いだろう。

後はもう・・・また精神を侵されて、人を襲う単なるSEEDフォームに逆戻りして、その時の英雄に討たれるしか、もう無いのだろう。

「何で・・・どうして・・・。」

涙は出ない。もう涙腺が無いから。鼻水も出ない。鼻はあるが、これは「リア・ゲートの顔」を再現する為の形だけのパーツであり、装飾品だから。

ミカは言葉が見付からないらしく、ただ、申し訳なさそうに斜め下に視線を落としている。

「・・・ふぁ・・・。」

エミリアが寝返りをうつのを見て、ミカと私は同時にハッとする。と同時にミカが少し慌てた様子を見せる。

「そろそろこの子が目を覚めます。詳しくはまたいずれ・・・。」
そう言って消えるミカ。と、エミリアが目を覚ましそうになるの
と同時に、部屋の真ん中でへたり込んでいるのは流石に変だろうと
思い、慌ててベッドの上で横になっているエミリアの隣に腰を掛け
る。

「・・・ふあ、あつ。んー、ちよつと寝ちゃった、かな?・・・
ん? あのさ、なんでこつち見つめてるの?」

「へー!? え、ええと・・・あ、寝顔を見てたのよ! 可愛いな
って思ってた。」

「ちよつ・・・! 寝てるのに気付いてたんなら起こしてよ!」

「んゝ、あんまり可愛い寝顔だったからゝ」

「あーもう、恥ずかし・・・」

そう言っ少し目線を外すエミリア。内心冷や汗ダクダクだった
のだが、汗腺も無いお陰でどうにか誤魔化しきれたようだった。

第二話「だけど生きてちゃいけないんだよ。」（後書き）

へーい、第二話ですだよだぜー！ もう第一話から二ヶ月と半月ぐらいが過ぎてようやっと第二話とかマジ遅すぎっすよね。すいません。まあサブ何で、そんなモンです。まあ実際の所を言うと、感想を頂いたのが嬉し過ぎて、執筆ハイブースタが掛かって止まらなくなっちゃったのが原因なんですがね。ってな感じでまた次回！

これ、完結まで相当掛かるよなあ・・・。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（前書き）

リアちゃんの知っている情報は大体三年前ぐらいから止まっています。でもパルムで生活していたので一部情報は一応知ってます。その内昔話とかしっかり書けたら良いなッ！

第三話「それでも私は幸せでいたい。」

次はマイシップに案内すると言うエミリアを一旦部屋から追い出して、ライアさんに連絡を取る。

何でもライアさんはどこかのエライ人らしいのだが、詳しくは知らない。

知り合ったのは偶然にも病室のベッドが隣り合わせだった事からだ。バイクで事故を起こしたとかで、立派な体格のやたら威厳のあるビーストやらキャスト、華奢で上品なニューマンやパリツとした正装のヒューマンなんかが続日見舞いに来ていた。しかも全員やたらと低姿勢だったのが印象的だった。

隣のベッドで精神病患者さながらにロープでベッドに拘束されていた私に向こうから話し掛けてきた時は驚いたものだ。少ししてすぐに打ち解けたのだが、その頃にはライアさんは先に退院してしまった。しかし時折お見舞いに来てくれて、しかも無料で特注の「凄い眼帯」を作ってくれた。

ライアさん曰く、「壊れたらまたいつでも新しいのを用意してやるよ!」との事だった。そのお返しに、私はライアさんがお仕事で疲れた時なんか一緒に街に繰り出して遊んでいる。

何でも立場上、仕事仲間とかは遊び等には誘い難いらしい。とはいえ、亜空間航行の実験やら何やらでライアさんの所もここの所は忙しいらしく、最近は随分とご無沙汰なのだが。

ライアさんに教えてもらった個人回線の番号に掛ける。そういえば、このビフォンから掛けるの初めてだな。でもきつと個人回線に掛かってきたら出てくれる人だろう。

『誰だ?』

ほらね。

「あ、ライアさん。お久しぶりです。」

『おおリア! 久しぶりだねー元気してたかい?』

「はい、お陰さまで。聞いてくださいライアさん！ 私、ついに職に就けたんですよ！」

「おお、やったじゃないか！ じゃ、何かお祝いにプレゼントとか用意しないとな。」

「あ、それでしたらあの、頼みたい事がありました。」

「頼みたいこと？ …… ああ、眼帯の修理とかかい？」

「いえ、完全に壊れてしまったので新調してもらいたくて。お願い、できますか？」

「ああ、分かった。で、何か追加したい機能とかはあるか？」

「うーんと… サーマルスコープと撮影機能、ですかね。」

「撮影？ なんだ、お前が着いた職業って情報屋か何かか？」

「いえ、折角腰を据えて仕事が出来るんですし、仕事仲間との思い出とかを写真にしたいなと思ひまして。」

「なるほど、な。分かった。技術部の連中に伝えとく。」

「あ、あともつと頑丈にしてください。」

「具体的には？」

「んーと… 真正面からの艦砲射撃に耐えられるくらいで。」

「ハハハッ！ そりやまた面白い注文だ！ 分かった、限界まで頑丈に作るよう言っておくよ。じゃ、いつ頃になるかは後で追って連絡する。じゃ、またな。」

「ええ、また。お体に気を付けてくださいね、ライアさん。」

「ああ、お前もな、リア。」

通信を終えてビジフォンをシャットダウンする。それから部屋の倉庫の手前の方に仕舞われていたパートナーマシナリーを起動して、基本設定を済ませる。

これで部屋に戻って来た時にはエミリアが乱して行ったベッドメイキングも完璧にしておいてくれる事だろう。

もし上手く行ってもその程度のポンコツであると認識しておけばそれ以降は過度な期待をしなくても済む。

起動準備に入っているパートナーマシナリーを置いて、先に行か

せていたエミリアに合流する事にした。

「あ、やっと来た。じゃ、次はマイシップの説明をするからね。」
そう言っただけでメモを暗唱して来たかのように業務報告と言った感じで淡々と説明される。その手際の良さは何度もこう言った経験をして体で覚えているのではと思わせる程だった。

転送装置からマイシップ内に入る。その瞬間、私は思い切り目を見開いて驚く。

「モデル9999（フォースサイン）！？ うそ、何でこんな高いのが・・・」

そう。この社用として使われている船は各惑星の要人や金持ちが使っているような超高級モデルなのだ。

確かにこれならば三惑星間を休む事無く2400時間飛び続けても壊れる心配も無いだろうし、ワープゲートを使わなくても別の惑星までほんの数時間で到着できるだろう。

しかしここで疑問が湧く。

「・・・何で社用の船はこんなに立派なのに、事務所は普通なのかしら・・・？」

「あゝ・・・この船今は社用として使ってるけど、元々はリトルウイングの社長のウルスラさんが個人で所有してた物らしくって。リトルウイングを創設した後になって社用船が無い事に気付いて、仕方なく個人用の船をいくつか社用にしたらだっただけさ。」

「なるほど・・・そのウルスラって人、相当儲けてるわね。」
「まあ、ウルスラさんだしね・・・」

そう言っただけで遠い目をしていたエミリアが、一つ可愛らしい咳払いをしてからまた説明を始める。

私はそれを適度に聞き流しながら船内の隅々に目を這い蹲らせる。

非常に綺麗に整備されているのでパツと見では分からないが、これはかなり使い込まれている。モデル9999は金持ちがステータスとして持っている程度の事が多いのでここまで使い込まれている物は非常に珍しい。

そしてメインコックピットを細かく見て行つて、驚愕する。

コイツ・・・改造船だ・・・！

法定速度を大幅に超える速度まで示せる競技用船のスピードメーター。更に本来なら設置されていないハズのターボロケットの稼働率を示すメーターまで追加されている。何より通常とはまるで形状の異なるコンソールがこの船全体の恐るべき改造具合を如実に示していた。

「ちよつとー！ 船ばかり見てないであたしの話を聞けー！」

耳元で叫ばれて慌ててエミリアの方を向く。

「あ、ごめんなさいねーエミリアー。ちよつと夢中になつちやつてゝ。」

「まったく！ あ、そうだ、会社ではあたしの方が先輩なんだから、敬うようにね！」

「あ、はい。よろしくお願い致します。」

「うわ、駄目だ。キモチワルイ。やつぱ今まで通りで良いや。」

「あ、あら？」

そう言つてちよつと困惑していると、エミリアは手近の椅子に座つて全身から力を抜いたようにダラツとする。

「はゝあ、それにしても今日は色んなことが一辺に起きて疲れた・・・。初めての仕事でしょ？ いきなりレリクスに閉じ込められちゃうし、あんたは・・・その・・・」

そう言つて言葉に詰まるエミリア。しかし私を見て少しでも口角を上げると共に、

「まあ、全部夢よね夢！うん、白昼夢！ 第一アレで生きてるハズ無いし！ あんたが生きてるって時点で夢確定よね！」

「あらあら、私はエミリアの夢の中ではどんな死に方をしたのか

しら？」

そう言いつつ、エミリアの座っている椅子の肘掛に腰を下ろす。

「う、それはあんまり・・・でもまあ、その・・・あたしが言った事を・・・その・・・信じてくれたのは・・・嬉しかった、かな・・・ま、夢だけどさ。」

その俯きながら恥ずかしそうに言うさまが余りにも可愛らしく、私はエミリアの頬つぺたを突付きながらもの凄く笑顔になる。

「エミリアったら可愛いこと言っちゃって、食べちゃいたくなるわね。」

「え！？あ、まさかソツチ系の・・・」

「言葉の綾よ、可愛い」

「むー！と、ともかく！あんたのこと色々教えてよ！」

そう言うと共に跳ね上がるようにして椅子から立ち上がるエミリア。立ち上がってから半回転してこちらを向くと、人差し指を私の鼻に突きつけて言う。

「わたし達、パートナーなんだから！」

「でもヒトに指差すのは止めておきなさいよ？」

「う・・・はい。」

私は完璧にSEEDだった。いや、人として生活はしていても結局、今でも私の身体はSEEDフォームである事には間違いは無いのだが。

それでも、自己を認識する上で私はヒトであるよりSEEDであると認識していた時期があった。今ではすっかりヒトを取り戻せているが、それでもやっぱり身体の方はSEEDのままだ。

それがどうしようも無く悲しく、どうしようもなく虚しい。

結局、私はどちらなのだろうか？

私はヒトなのだろうか？

一月も飲まず食わず眠らずで居られるヒトなんて私は電源を落としたキヤストぐらいしか知らない。

私はSEEDなのだろうか？

SEEDウィルスを自発的に散布しないように務めるSEEDフォームなんて聞いた事が無い。かのヘルガ・ノイマンですら他のヒトにSEEDウィルスを植え付けて散布していたのだから。

私はヒトなのだろうか？

身体を変異させ、SEEDフォームを産み出す事で無限に近い戦力をその身から搾り出す事の出来るヒトなんて有り得るハズが無い。私はSEEDなのだろうか？

ヒトを庇って死ぬ事を望むSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？ ヒトを大事に思うだけの心を持ったSEEDフォームなんて有り得るのだろうか？

私はどちらなのだろうか？

心はヒトであると信じたい。

だが身体がSEEDである事は否定のしようが無い。

私はSEEDとして沢山のヒトを殺した。

その何れもが死んでも仕方ないと言われるほどの最底辺とも言える連中だったとしても、私は本当に沢山のヒトをその手に掛けた。その中には私の両親も含まれている。

両親に関してだけは「子供達」に任せず、自分の手で殺した。頭から硬い金属製の床に向けて叩き付けた。小汚い花を床に咲かせた。私にとっての最高の死に場所は、エミリアを庇ったあの海底レリクスだった。それでも私は生き延びた。いや、生き返らされた。

きつとカミサマと言うヤツが私に天罰を与えたのだろう。ヒトである事を一度諦めて、SEEDと言うバケモノになった事を言い訳に、実の両親すらも手に掛けた私に。

「理想的な死に方はさせない」と。

「もつと苦しんで生きろ」と。

エミリアはどうやらあのレリクスの一件を夢だと思っているらしい。

だからそれが、「夢」から「現実」に変わった時、きっと私の正体を知ると共に私から離れてしまうのだろう。

それは凄く悲しいし、凄く辛いし、凄く苦しいが、仕方の無い事だ。

SEEDフォームと一緒に居たら、いつ汚染されるか分かった物じゃ無いんだから。

むしろ穢れの知らないあの子を犯してしまう前に、自分から離れた方が良くのかも知れないとすら思う。

でも。

でも、もう少しだけ。

もう少しだけ、この暖かい夢を見ていても・・・良いでしょう？

「エミリア、そっちは終わったかしら？」

「ま、まだ・・・ってうわぁ!？」

「エミリア!」

エミリアがヴァーラの一撃を辛うじて避けると、少しみっともない体勢でヴァーラの前から逃げる。

追い討ちを掛けようとしているヴァーラの両腕の手首にあたる部分にフォトンの弾丸を撃ち込む。

痛みで悶えながらもこちらを向いたヴァーラの両目が次の瞬間にはフォトンの弾丸が突き刺さり節穴になる。

悲鳴を上げるべくして開けられた口に更にフォトンの弾丸を撃ち

込まれ、とうとうヴァーラは絶命する。

「うゝん・・・やっぱり200メセタのレンタルブドウキ・ハドじや精度悪いわね・・・。」

「そのレンタルブドウキ・ハドにも劣るあたしの戦力・・・やっぱあたしこの仕事向いてないんだよ・・・。」

精度の低い整備も悪いレンタルされたハンドガンのブドウキ・ハドの照準を微調整していると、エミリアが誰が見ても分かるほど落ち込んでいる。

「でもみんな最初はそんな物よ？ 英雄イーサン・ウェーバーも同盟軍総司令官フルエン・カーツも最初は素人から始まつてるんだから。」

「異議あり！ キャストは最初から基本的な戦闘方法はインストールされてると思います！」

「あらあら？ でもインストールされてる分だけじゃハウツー本読んだヒューマンや何かと変わらないのよ？ 現に我が家に乗り込んできたキャスト共だつて・・・。」

そこまで言つてこれ以上はマズイと思い、止める。

「と、ともかく、最初はみんな素人なのよ。諦めるのはもう少し頑張つてからにしましょう？ それに危ない時は助けてあげるから。ね？」

「うゝ・・・はあ、分かつたよ。もう少し頑張つてみる・・・。」

照準の調整を終えて、先へ進む。

ここは惑星パルムのラフォン草原。

生え茂る草に寝転びなくなるのは恐らく万人に共通する感覚のハズだ。勿論私も寝転びたいが、仕事で来ているのでそうも言つてられない。

今回の仕事はヴァーラの群れの討伐。何でも最近、この辺の農家が飼育しているコルトバがヴァーラの群れに執拗に狙われているらしい。

大した報酬は貰えない物の、危険はそこまで高くは無いのでエミ

リアの実力を見るには丁度良いと思い、この仕事を引き受けた。

エミリアは以前、クノーと言うヒトに戦闘の手解きを受けた事があるらしく、基本はちゃんと出来ていた。基本が出来ていれば本来ならそこまで苦戦する事も無いのだが。

「うげ!？」

エミリアは基礎的な体力がまるで無い。

エミリアの背に飛び付いているポルティの四肢の末端を撃ち抜いて剥がし、数回バウンドしてこちらに転がってきたダルマ状態のポルティの頭部を踏み潰して殺す。

その間にエミリアは正面に居る二匹の内片方を右手のセイバーで切り伏せ、もう片方を数歩下がってハンドガンによる射撃で仕留めていた。

たったそれだけでエミリアは肩で息をしている。戦闘の緊張と言うのも勿論あるのだろうが、それでもこれは致命的な気がする。

「・・・エミリア、帰ったら筋力トレーニングしましょう?」

「えー!」

無事にヴァーラの群れを殲滅した頃には、エミリアは大の字になってそこら辺中に血溜まりの出来た草原に寝転がって居た。

シールドラインのお陰で返り血を浴びてないのでエミリアから出た出血では無いとすぐに分かるが、服が赤いせいでヒトによつては即座に勘違いを起こすレベルで衝撃的な絵だ。

「もう・・・はぁ・・・もうムリ・・・動けない・・・」

そう言っただけ疲労を全身で表現しているエミリアの傍に行く。

「あらあら。それじゃ、よっこいしょと。」

そう言っただけエミリアを抱き上げる。思っていた以上に軽くて驚いたが、何よりいきなりお姫様抱っこされたエミリアはかなり困惑している様子だった。

しかしそれでもすぐに慣れたのか、異性では無いのであまり意識せずに済んだのか、直ぐに平静に戻っていた。

「それにしてもリアってほんと何者なの？ 精度とか威力にぶつくさ文句言う割にはヴァーラー体倒すまでにほんの二秒ぐらいしか経ってなかったし。って言うか、ハンドガン一丁であの数相手にあそこまで立ち回れる？ フツ！。」

「エミリアだって沢山修羅場を潜り抜けていけばすぐにこれぐらいは出来るようになるわよ？ あなたはとってもスジが良いもの。同じ失敗は繰り返さないし、覚えも良いし。」

「そ、そう？ え、えへへ・・・なんか恥ずかしいな・・・。」

「でも基礎体力が低すぎるから、ちゃんと鍛えないといけないけどね。」

「う・・・で、でもその辺もテクニクで・・・！」

「テクニクを使っても体力は使うわよ？」

「むぐぐぐ・・・あ、そう言えばあんたってテクニク使わないよね？ 何で？」

「理由は無いけれど、強いて言うなら銃が好きって事かしら？」

「へ・・・。」

それからも他愛ない話をしながら船の場所まで歩いて行った。

第三話「それでも私は幸せでいたい。」（後書き）

第一章、ようやくの終了です。

この後は多分、普通に第二章が始まります。

これからも大体一章三話ぐらいに纏めたら幸せだなあ・・・。

そうすれば大体、三十話目くらいでラストですからね。まあ色々
脇にブレまくるんでしょうけどね！きつと！

追記：ライア総裁はリアの正体や経歴を知った上で親しくしていま
す。その辺もその内書けたらいいな！

第四話（間）「ゲラールには従順清纯派メイドさんタイプより生意気タメ口ボク

マクマホンじゃ無くてオクラホマミキサーじゃ無くて幕間ってなヤツです。あの、大体のアニメや漫画で一番内容が無くて笑える、あの辺りですね。

なるべくギャグっぽく仕上げようと頑張ったんですが、所詮は金属製の箱ッ！（キリッ）

ギャグセンスは流石の皆無ッ！！（キリッ）
無駄な努力だったッ！！（キリッ）

第四話（間）「グラールには従順清純派メイドさんタイプより生意気タメロボタ

「あら、意外と出来る子だったみたいね？」

そう言いつつ、随分と綺麗になっている部屋を嘗め回すように見回しつつ、キッチリとベッドメイキングの施されたベッドに腰を掛ける。

と、同時にまるで魔法少女から露出度を引いて、聖職者の服装を足し合わせたような緑色の服に身を包み、服と同系色の長い帽子を被った、私のお尻ぐらいの背丈のお人形のような少女がトコトコと歩いて来た。

確か型番は『GH440』だったか。出発前に入力しておいた名前を呼ぶ。

「ただいま、メリー。ちゃんとお仕事できる子みたいでよかったわ。」

「はい、お帰りなさいご主人。」

「ん？」

「？　どうかした？」

「いえ、タメロボのパートナーマシナリーって随分と斬新なセッティングだと思っただけよ。」

「ああ、それはきつとニーズってヤツだね。きつと居るものなんだよ、従順なメイドさんタイプより生意気な妹タイプの方が燃えられる人が。」

「ふん？　あなた随分詳しいのね？」

「まあ、そう言うニーズに応える為に作られたタイプだからね。」

「へっ・・・ちなみに、燃えるって何に燃えるのかしら？」

「え、それは・・・。」

頬を赤く染めて目線を外す。その様子があまりに可愛くて、ついついイジワルしたくなってしまった。

「な・に・に・燃・え・る・の・？」

「え、え〜と・・・その・・・」

「え〜とじゃ分らないんだけど〜？」

「う、ううう・・・」

顔どころか耳まで真っ赤になり、もう涙目になってしまい、帽子を引っ張って目元まで隠してしまっている。

流石にこれ以上はかわいそうだと思い、後頭部のあたりにそっと手を添えて撫でるようにしながら、

「うふふ、大丈夫よ〜、ちゃあんと分かってるからね〜。それに私、機械にそう言う事を求めるつもりも毛頭無いから安心してね〜。」

「あうう・・・酷いよお・・・。」

「あらあら、一応同性なのだけど〜？ あなたってむしろそっちの方がって子なのかしら〜？」

「ち、違うよ！ そうじゃ無くて！・・・んもう、ご主人のイジワル！」

そう言っただけのベッドのある場所から離れて、キッチンへと逃げるように走って行く。

それを笑って見送ってからバスルームに行き、シャワーを浴びて寝巻きに着替えて床に着く。

その晩、私の眼帯として巻いているタオルを取ろうとした誰かの腕を捕まえる。嫌に細い腕だった。

「誰？」

「あ、あの、ボクだよ！ メリーだよ！」

「ああ、メリー。」

そう言っただけで腕を放してやる。上半身を起こし、私の隣に座るようにしているメリーを見下ろす。後でメリーから聞いた話なのだが、その時の私の目付きはまるで、『お預けをくらった猛獣のような眼』だったらしい。

「メリー？」

「は、はい！」

「あなた、少し生意気に設定されてるらしいけれど、世の中には生意気や悪戯で済む事と済まない事があるって、わかってるのかしら？」

「え、ええ、まあ……。」

「……良い？ 『私から絶対に眼帯またはそれに準ずる物を取らない事』。分かった？」

「は、はい！ 分かりました！」

「うん、分かれば良いのよ、分かれば。」

そう言っただけでメリーの頭をポンポンと軽く叩いてから布団を持ち上げて自分の体に乗せ、眠りにつくとする。その時、ぼそりと言付け加えておく。

「もし破ったら、起動状態でスクラップにするから。」

「は、はい！ 心得ましたあ！！」

「フツ・・・まだまだだね、エミリア。」

「むぐぐぐ・・・ちよつとリア！ なんなのよこの生意気この上ないパートナーマシナリーは！！」

「あらあら」。

今日も今日とて、パルムのラフォン草原。今度は突然変異の原生生物を捕獲して欲しいとお達しだった。名前は・・・失念した。依頼主はイン・・・なんとか社って大企業だったと思う。

何でも、色々な研究に使うらしいのだが。しかし、強引に実験台にされた経験のある私としては若干抵抗のある仕事だったりする。とは言え、仕事は仕事。

報酬はかなりしょっぱかったような気がするが、それ位の報酬し

か出来ないような危険度の低い依頼の方が、エミリアの訓練には丁度良いだろう。

まあ、今回はいつの間にやらシップの中のコンテナに潜んでいたメリーが付いて来てしまっているのだが。

「セイバー系統の武器を持っておきながらダガー系統の武器を扱うようなド至近距離まで近付くなんて・・・ホント、ハウツー本を読んだだけって感じだね。」

「だってしょうがないじゃん！あたし最近まで戦ったことなんてなかったんだし！」

「ボクだって最近起動したばかりだよ？そんなボクにも劣るなんて・・・まったく、本当に駄目だなあ。」

「うぐぐぐ・・・もう！ リアも何か言つてよ！」

「あらあら。」

「そこ！誤魔化さない！！！」

「んゝとゝ・・・。」

正直、メリーの言っている事は吐き気を催す程度には正論だ。故に、真正面から言い返すのは難しい。なので、今回は揚げ足を取る方を選ぼう。

「メリー、ちょっと言い方が悪いわよ？ あと、貴女も人の事言えない程度には槍を振る間合いが近いんじゃないかしら？ 折角の長い得物なのに、そのリーチが生かせてないわよ？」

「え、うん・・・でも、エミリアにはこれ位言わないと思って思ったんだけど。」

「いいえ、エミリアはアレで結構飲み込みが早いんだから。そんなに罵詈雑言織り交ぜなくても分かってくれるわよ？」

「うん・・・分かった、今度から気を付ける。」

「うん、素直でよろしい。」

視線を少しずらし、エミリアへと向ける。少し離れた場所で、エミリアがその場で軽く素振りをしている所だった。

と、その奥で干し草にも似た、褪せた黄緑色の巨体が動いているのが見えた。全身は硬そうな外殻で覆われているらしく、手足が合計で四本しか無い所を除けば昆虫が最も近い分類に見える。

その両腕と頭部は胴体や足に比べると明らかにオーバーサイズであり、両腕の先には大きく、金属光沢のある爪が生えていた。

しかしその爪自体は特別尖っているワケでは無く、むしろそれはメリケンサックの様な用途を感じさせる物だった。

「エミリア、ちょっと静かに。」

「へ？」

「奥にあの・・・ア・・・アス・・・え〜と・・・なんだっけ？」

「アスターク。まったく、何でブリーフィング受けてないボクが分かって、まともにブリーフィングを受けたハズのご主人が分からないんだ？」

「あらあら〜。うん、そのアメトーク」

「アスターク。何で面白い回とつまらない回が半々の深夜番組と間違えるの。」

「そのアカツキ」

「アスターク。金ぴかロボでも忍者の秘密結社でも無いから。」

「そのアレイスター」

「アスターク。どうして二十世紀最大の魔術師の名前が出てきたの？」

「そのモハメッド・アリ」

「アスターク！！！！どうすれば伝説のボクサーと間違えるの！？それに『ア』しか合って無い上にその『ア』も中途半端な所だよね！？もつご主人、いい加減にしないとホントに怒るよ！！？」

「そんなに怒鳴るから〜。ホラね〜？」

そう言ってアゴで斜め上の方を指す。と、そこには先ほどまで遠くに居たハズの巨体が、右腕を大きく振りかぶったポーズで上から降って来る所だった。

エミリアは飛び上がったタイミングに合わせてしゃがみ込む事で回避し、メリーは慌てて真後ろに跳んで逃げる。

私はどう動いても今からだと間に合わない。

アスカラングレーじゃ無くてなんだっけ？が目の前まで迫る。

私は咄嗟に膝を折ってその場に崩れるようにして仰向けになるように背中から倒れこみ、ポケットから強烈な睡眠薬が入ったアンプルを右手で取り出す。

アサシングリッドが私の頭の上数ミリの所に腕を落着させると同時に、そのままディープキスが出来そうなほど顔に近いアジアンカノンフージェネレーションのアゴと思しき部位の下の方、平たく言えば首の血管が通ってそうな辺りに右手に握っていたアンプルを手が埋もれるほど深くに差し込み、中身を挿入する。

すると突然、力が抜けたかのようにガクツと頭が前に落ち込み、

「~~~~~!!!!!!」

本当にディープキスするハメになってしまった。

「アッサラームアレイクム・・・恐ろしい相手だったわ・・・。」

「ま、まあまあ！別にファーストキスとかじゃ無いんでしょ？ ホラ、そんなに気を落とさないで！」

「と言うかアスタークだってばご主人。アラビア語で挨拶してどうするつもりなのさ。それにしても何と言うか、張り合いの無い仕事だったね。」

「ああ、それならワケがあるそうよ。」

「ワケ？」

「ええ、何でも、複数の軍事会社や傭兵に依頼を回したらしくって。それで、10のグループで一匹ずつ、合計10匹捕まえるって計算らしいわよ。」

「なるほど、つまりその10のグループで報酬が等分されて、そのせいで異常にしょっぱい金額しか報酬が貰えなかったってわけね。」

「ええ、そう言うこと。で、ウチが一番速かったらしいわよ。報告入れる時に驚かれちゃったわ。」

「ふん。ま、ボクとしてはどうでもいい事だけどね。」

「あら薄情ね。」

「うん……あたしとしてはもうちょっただけ、練習したかったかなあ……。」

「あらあら？じゃ、やって行く？特別メニュー」

「う、遠慮しとく……さ！とっとと帰ろう。帰って運動した分何か食べたいし！」

「ボクも早く家に戻ってお風呂に入りたいな。」

「あら、じゃ、早上がりさせて貰いましょうか？」

「「おー！」」

第四話（間）「グラールには従順清纯派メイドさんタイプより生意気タメロボタ

本編と関係があるような無いような？そんな第四話でございまして
ございましたですよ！ さてさて、次から第二章に入って行く形に
なると思いますですよ！ ってなワケで、次回までしばしお待ち
を〜！ではでは〜！

あ、ちなみにこのパートナーマシナリーの話は雑炊さんのを読んで
感化された結果です。勝手にパクってスイマセンでしたあ！！

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」（前書き）

何でこんなに次話投稿が早かったのかって?! それああんた、事前にこの辺りまで書いてあったからに決まってるでしょ! ってなワケで、本編第二章、始まり始まりでございますー!

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」

まるで揺れの無い快適極まりない船をわざわざ手動航行モードでしかもわざわざワープゲートを通らないルートで悠々と航行して行く。

行き先はクラッド6のリトルウィング社用船用船着場だ。鼻歌交じりに飛ばしている私の肩をエミリアが叩く。

「ねえ、ちよつと良い？」

「ん？ 何かしら？」

「何でわざわざ手動で、しかもワープゲート使わないルートで行ってるの？ 経費と時間の無駄じゃない？」

「あらあら。でもね、エミリア。さっき見た入ってるお仕事の中には急ぎのお仕事は一つも無かったもの。時間は少し無駄に使うぐらいが丁度良いのよ？」

「いや、でも結局燃料は無駄使いしてんでしょ？ そう言うのでイチイおっさんにどやされるのイヤなんだけど。」

「大丈夫よ。無駄使いしたのは私だもの、どやされるのはきつと私だけよ。」

「いや、だからあ・・・あ、通信だ。」

そう言つて少し強引に話を切り上げてエミリアがコックピットフロアの中央にセッティングされている仕事の受付を行ったり会社からの通信を受ける「スゴイビジフォン」の方へ行き、掛かって来た通信を受ける。発信先の名前を見た時、露骨にエミリアの表情が曇る。まるで職員室に呼び出されてイヤイヤながらに入る子供のような顔で回線を開き、通信を始める。

向こうが色々とかましく言い続けているのか、エミリアは

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・はい・・・・・・・・。」

と言つて答えるばかりで、明らかに表情もテンションも沈んで行く。

「ええと、本人は今月のツケは払つたつて言つてたんですけど・・・・はい・・・・分かりました、本人にそう伝えます・・・・。」

そう言つて通信を切り、エミリアが海溝を思わせる程に深く重い溜め息を吐く。

「今の誰宛？」

「おっさん宛。ちなみに今のは家からの転送通信。ついでに相手はおっさんの行きつけの飲み屋。おっさんさあ、あたしには働けーつて言うけど自分は昼間からお酒飲んでばっかだし、飲み屋はツケで飲んでくるし・・・・バリバリ働いてとは言わないけど、人並みにはちゃんとして欲しいよね。アレでも一応あたしの保護者なんだし。」

「確かにそうね。ツケ払いは良くないわね。まあ私も食い逃げの一つや二つや三つする事もあるけどね。」

「いやいやいや、食い逃げの方がマズイでしょ!？」

「後で払いに行けば良いかな。つて思つて。」

「そんなワケ無いでしょうが!？」

「でもツケ払いつてそう言う事じゃ無いのかしら?」

「むむむむ・・・・はあ、ともかくあたしはこの事をさっさとおっさんに伝えたいから、ちよつとだけ急いでくれない?」

「はいはい。」

そう適当に答えてターボポケットに点火して急加速をしたら、エミリアが盛大に転んだ。

そして椅子に寄りかかって眠っていたメリーは、コテツと転んだがそれでも寝続けていた。

どうやら急激な加速や急速に変わる重力方向に耐えられなかったらしく、エミリアが気分を悪くしたので、クラッド6に着いてから十分ほど小休止を取ってからリトルウイングへと向う。

歩いてる最中もエミリアは何処かおぼつかない足取りで、あっちへフラフラこっちへフラフラ、生垣に突っ込んだりもしていた。

少し面白いが流石に可愛そうなので、エミリアを支えながら事務所へと入って行く。

事務所では丁度昼休憩の時間なのか、チェルシーが電腦エネルギー補給用ゼリー（ライチ味）を吸いながら、テレビに釘付けになっていた。

流れているのはニュースらしく、グラールチャンネル5の新人リポーターの紫色のツインテールが少しリズムカルに画面の中で揺れていた。

「着工より二年。先月、ついに完成した亜空間発生装置の完成式典がパルムの同盟軍本部で行われました。式には、亜空間理論を確立した総合科学企業『インヘルト社』の『ナツメ・シュウ』代表取締役をはじめ、開発に加わった軍関係者や多くの企業が参加しました。今回披露されたこの装置により亜空間発生実験が成功すれば、有人での亜空間航行計画へと大きく前進することとなります。現在グラールが抱える資源枯渇問題に光明をもたらすこの研究、絶対に成功してもらいたいものですね。」

今日のグラールチャンネル5ヘッドラインニュースはここまで！

ニュースキャスターはハルでした！ バイバ～イ！」

ニュースが終わる。と、画面で流れるスポーツニュースの特ダネらしい、ユニバースボール出場選手達をチュエルシーが睨みながら、何故か怒声を上げる。

「ノー！ ニュースそれで終わりナノ？ 納得いかないヨー！」

「なんでいきなり怒ってるの、チエルシー？」

「今のニュース、スカイクラッド社が出てないネ！！ 亜空間航行の計画に、イツパイ出資してるんだヨ！ ウチの良い宣伝になると思っただのニ～！」

「あらあら～。」

しかし多額の出資をしているのは何もスカイクラッド社だけでは無いように思える。何せ、ほぼ確実にお金になる亜空間研究。

誰が一番お金を出したかによってどの程度の権利を得られるか等が決まってくると考えると、裸一貫になろうとも亜空間研究に出資したくなるものだ。

つまり、ある意味ではたった今このグラールで財政の実権を握っているのはこのイン・・・ええと、インヘルト社であると言っても過言では無いかも知れない。

それを鑑みるに、この出資ダービーで一番が何処なのかを伏せるべく、出資した企業の名前を一切出さないと言うのは、ある意味では正しい判断とも言えるかも知れない。

もっとも、これらは全て単なる想像でしかないのだが。

「スカイクラッド社はウチの本社じゃん。リトルウィングの宣伝にはならないって。」

「あら、でも風が吹けば桶屋が儲かるのよ～？ 少しでもスカイクラッドの知名度が上がって、波風立った方が、リトルウィング

の利益にも繋がると思うんだけど？」

「そう言われると何かそんな気もして来るけど・・・そんなことよりチエルシー。おっさん、いる？」

「あ、そういえば、シャツチョサンが二人に用があるって言ったネ。ニユース見ててすっかり忘れてたヨ。」

「ま、いいけど・・・奥におっさん、いるんだよね？」

「シャツチョサンのトコ行くなら、ついでにアレもお願いネ。チヨツト、待っててネ。」

そう言ってチエルシーはイスをスイーツと滑らせて移動し、自分のデスクまで戻ると、そこで一枚のメモのような物を取り、またスイーツとこちらへと戻って来てエミリアにそのメモを渡す。

「ランジェリースポット、リッチベルベット。ダグオラシテイ店・

・・・ねえ、このいかかわしい領収書は、何？」

「経費じゃ落ちないカラ、自腹ダヨって伝えてネ！」

エミリアの額に縦に筋が立って行く。どうやら大分トサカに来たようだ。

「あのエロオヤジ・・・！ ツケの払い忘れのみならず、経費の無駄遣いまでするか！」

なぐんだ、クラウチさんもしてるんじゃない、経費の無駄遣い。

私は、ふふんと鼻を鳴らして少し胸を張ってエミリアに少し得意げに、

「ほらエミリア、私の燃料の無駄遣いなんてまだまだ生温い物でしょ？」

「でも金額だけなら燃料の方が高い気がするけど。最近、値段高等

してるからね、航空燃料って。無駄に噴かした航空燃料に、更に無駄に噴かしたターボロケットの燃料代を合わせたら、これの1・3倍ぐらいになりそうだし。」

「うぐ……し、資源枯渇問題、早くどうにかならないかしらね……。」

まさかのカウンター。これには流石に面食らった。と、そんなやり取りを見ていたチエルシーが、時計を見て少しハツとすると共に、手を叩きつつ私達に声を掛ける。

「ハイ、もうお昼休み終わっちゃうカラネ！ 文句は奥でネ！」

「ちよつとおつさん！・・・ってうわ、酒臭っ！」
「ホント・・・まるでお酒を撒いたみたいに強烈ね・・・。」

到着早々、エミリアが思い切り顔をしかめる。

「よお、来たか。」

「来たかゝ、じゃ無いっての！いつもの飲み屋からまた電話来たんだよ！いいかげんツケを払って欲しい、って！」

それから先ほどチエルシーに渡された領収書を、クラウチに突き付けるようにして見せる。

「それに、これ！」

「ああん？こりや資料の経費じゃねえか。どうしてお前がもってんだ？」

「こないかがわしいものが経費で落ちるわけがないでしょ！常識で考えろ、常識で！」

「ああ？バカ、わかってねーな。こういう根回しも必要なんだよ。」

「どつという根回しですか・・・？・・・モトウブの有力なローグスが経営してるとかなら分からなくもないですけど・・・。」

「お、良く分かってんじゃねえか。」

「ええゝ！？」

正直、ほとんど冗談だった。そもそもモトウブのローグスが水商売の店を経営しているとは思っていなかったし、しかもダグオラシテイみたいに大きな街に店を堂々と置いているなんて。

いや、それより確かにこう言うちよつと悪い事もしなくちゃいけないような仕事とは言え、本当にローグスと関係を持っているとは。

やはりビースト、横の繋がりが侮れない。

「まあいい、それよりも仕事の話だ。」

そう言うつと、クラウチさんは画面に映る水着の女性を幾つか最小化して、幾つかの写真や資料を大きくして見えるようにする。

「喜べ、お前たちにふさわしい仕事を見付けてきてやったぞ。こいつは緊急かつ、重要な依頼だ。急ぎ、探して欲しいヤツがいる。」

「人の搜索・・・？ 何かの重要参考人とか、要人とか？」

「うんにゃ。俺が前に金を貸したヤツ。つまるところ、借金の取立てだ。」

「依頼主おっさんじゃん！ そんなの自分で探しに行け！」

「そうですよ。私達は使いつぱしりじゃ無いんですから。」

「やかましい！ どうかのタダ飯食らいがレリクスでの仕事ポカつたからロクな依頼がこねえんだよ！」

「う・・・それを言われると・・・」

「ちよつと・・・言い返し辛いわね・・・あ、でもポカしたの私じゃ無いですね。」

「んじゃあエミリアだけに行かせるか？」

「それは・・・ちよつと・・・」

「ちよ！？ むしろその反応の方が傷つくんだけど！？」

「コラ、ここで言い合つても仕方がねえだろ。さつさと話進めんぞ。」

これ以上脱線すると修復不可能だと判断したのか、そう言うて無理やり話を切り替えるクラウチさん。なるほど、この人はこうやってのらりくらりとかわすのか。

「搜索対象者の名は「ワレリー・ココフ」。51歳、男性・・・種

族はビーストだ。ワレリーの船は、モトウブのクロウドッグ地方と場所が特定している。シティでもカジノでもなく・・・とてもヤツには用事が無さそうなヘンピな場所だ。」

「どうやって船の場所を特定したんですか？」

「ワレリーの嫁がアイツの船に発信機を仕込んでるんだと。で、訪ねて行ったら、取立てなら場所教えるからアイツに直にやれって、何故か怒鳴られちまった。まそんなワケで、アイツの船の場所が分かるんだ。分かったか？」

「ええ、一応。」

「場所まで分かっているのなら、なおさら自分で行けば良いじゃん・・・。」

「何か言ったかごくつぶし？」

「なんでもないですー！」

そう言つと共にエミリアが踵を返すと、私の袖を引っ張って、

「こんな酒臭い場所にいたら、飲んでもないのに酔っちゃう！さ、いいいい！」

と言う。まあ確かにもうそろそろこの場を離れたかったのは事実だ。なんせ本当にお酒の匂いがキツイ。エミリアに袖を引っ張られるままにその場を後にする。

船の中でぐっすり眠っていたメリーを部屋まで運び、ベッドの上に置いて部屋を出る。

部屋を出て真っ先に向うのはウェポンショップ。200メセタで借りていたブドウキ・ハドを返却し、新品の『ブドウキ・パム』を購入する。セットでダガータイプの武器を買うと割り引かれるそうなので、少し出費がかさむのが気になったが、とりあえず購入する事にした。

GRM社製のロングラン商品、その名もズバリ『ナイフ』。

テノラの製品は確かに頑丈で、大出力なフォトンジェネレーターを搭載しているので威力も見込めるが、いかんせんバランスが悪い。銃火器も、確かにバランスも大事だが、こと刃物に関しては特に重さのバランスが重要になって来る。銃火器での戦闘の際、百発百中がやはり最高だが、そう言うワケにも行かない。正直な所、百発中七十発が当たれば十分に生き延びる事が可能だ。しかし、刃物を用いた近接戦闘ではそうも言ってられない。

一太刀読み違えればその時点で胴と首が離れかねないし、一瞬遅かっただけで心臓を貫かれかねない。

まあ私はその程度では死なないのだが、それは横に置いておこう。軽量かつ高い次元でバランスの取れた素晴らしい武器と言えばヨウメイ社だが、それはフォトンジェネレーターの出力を犠牲にした上で成り立っているワケであり、やはり威力の不足が目につく。そ

れにデザインもあまり好きじゃない。

それらを統合した上で、やはり最高の妥協点としてバランスの取れた良い製品を提供しているのがGRM社だ。まあ、GRMタイマー等と呼ばれる故障の多さが目に付くが。

流石に新品でそれは無いハズなので、今回の仕事分は持つてくれるだろう。

・・・まあ、今回の仕事は実入りの無い仕事なので、次の仕事分も持つてくれないと困るのだが。

船に戻ると、エミリアがいつも首に掛けているヘッドフォンを珍しく耳に着けて曲に聞き入っていた。

足音を立てないように注意しながら近付き、後ろからギリギリ視界に入らないぐらいの所まで耳を近付ける。僅かに聞こえて来た曲は、

「・・・I don't want this moment
to ever end・・・Where everything
nothing without you・・・I want
you to know!!」

「わあ!？」

「あらあら、驚かせちゃったかしら? それにしてもエミリア、『With Me』なんて聞いているなんて。人は見かけに寄らない物ね?」

「良いじゃん別に! それに、いつもはもっと別の曲も聴いてるし!」

「あら、悪いなんて言っていないのよ?」

エミリアが少し慌てたような手付きでヘッドフォンを頭から下ろして首に掛け、音楽プレイヤーのスイッチを切る。それから座席のシートベルトをキチツと締める。

「さ、どうぞ。行くんですよ?」

「あらあら。曲を聴きながらでも良いのよ?」

「そりゃあたしだって聴いてたいけどさ・・・だってあんたの操縦荒っぱ過ぎるんだもん。曲に集中出来ないって。」

「ん、でも今回は素直にワープゲートを使おうと思ってるから、多分大丈夫だと思うわよ?」

「え、そう? じゃ、大丈夫かな。」

そう言ってヘッドフォンを耳に被せるエミリア。音楽プレイヤーを取り出し、操作していると、何かを思い付いたように手を止めて、

私の方を向く。

「ねえねえ！　なんだったらさ、船内スピーカーで流そっか？　あんたも好きでしょ？」

「あらゝ、それは名案ねゝ。じゃ、お願いしようかしらゝ？」

「うん！　任せてよ！」

そう言うと共にヘッドフォンを再び首に掛け直し、席を立つて船内スピーカーに繋がる端末を弄り始める。私はコックピットに座ると、揺れないように注意しながら船を発進させる。

ほとんどオートでモトウブ行きのパープゲートの前まで着いた辺りで、船内スピーカーからノリの良い、割と激しい数世代前の曲が流れ始める。

「じゃ、行くわよゝ。ちゃんとシートベルト締めておいてねゝ。」
「うん！」

「へー・・・おっさんはへんぴな場所って言ってたけど、その割りに観光プラント並に船が多いじゃん。」

「そうね、自然観察とかハイキングとかが静かにブームなのかしらね。」

「それは無いと思うけど・・・ってかさあ、何であたしらがおっさんの貸したものの取立てなんかいけないワケ？　はあ、経費だけじやなくて以来まで私物化し始めてるよ、あのおっさん。誰かガツンと言ってくれないかなあ・・・。」

「ガツンと、ね・・・。私が言いましょうか？　正直、上司がアレだと働く気力も湧かないし。」

「言っても良いけど、多分無駄だと思うよ？　あたしも言った事あるけど、全然話聞いてくれなかったし。あ、いや、でもあれはあたしだから、かな・・・。」

エミリアが少し暗い顔をして俯き、呟く。

「どうすればあたしの話を聞いてくれるようになるのかなあ・・・。」

「ん、そうね・・・うん、取り合えず、依頼を遂行しましょう。」

「えー？　そんな事であのおっさんが態度変えると思う？」

「少しずつ依頼を遂行して行けばその内、話も聞いてくれるようになると思うわよ？　でも、焦りは禁物よ？　『信頼と言う木は育つのが遅い木である』って言葉があるぐらいだもの。」

「信頼、かぁ・・・でもなぁ・・・正直、この仕事って結構キツイし、あんまり向いてないような気がするし・・・だってホラ、さっきだってあんたのパートナーマシナリーに・・・」

「おいお前達！ここで何してる！」

その声に驚いて辺りを見渡す。が、中々声の主が見当たらない。

確かに少し高めの男性っぽい声だったハズだ。声からして身長165は超えていそうなのだが、まるで見付からない。

「どっち見てんだよ！こつちだこつち！」

そう言われて真後ろの下の方を見る。と、そこにはまるで子供のような背丈しか無いビーストの男性が立っていた。肌は黒く、目が青く、髪はオレンジ色で逆立っている。

その目付きや物腰から、これは子供では無く大人の小ビーストだと当たりを付けたが、正直言って小ビーストなんて初めて見た。

「あ、あら？ あらあら、もしかして小ビーストの方ですか？」

「そつだよ、見りゃわかんذار・・・で？お前らここで一体何してるんだ？」

「あたし達、人を探してるんです。」

「人探し？」

「トニオー！こつちは駄目だよ、人っ子一人居ない。そつちは・・・ああ、二人見付けたんだ。」

そう言ってもう一人、こちらにもまた非常に背丈の低いビーストの女性が現れた。こちらにも歩き方などから察するにほぼ間違い無く大人の小ビーストなのだろう。

「いや、こいつ等は今来たばかりの同業者らしい。」

「あ、そうなんだ。」

「ええと、あなた方はここで何を？」

その質問に対して、トニオと呼ばれた男性の方の小ビーストが、
「おつといけね」と言った事を小声で言つて、

「その質問に答える前に、自己紹介をさせてくれ。俺はトニオ・リマ。んで、こっちは・・・」

「あたいはリイナ・リマ。あたい達、夫婦で傭兵をやつてゐるんだ。」

「あ、あたしはエミリア。エミリア・パーシバル。んで、こっちはあたしのパートナーの・・・」

「リア・ゲートです」。私達はリトルウィングと言う軍事会社の社員でして、お仕事で人を探しているんです。あなた方も人探し何かですか？」

「ん、俺達はこの文化保護地区を見回るように言われて来てるんだ。」

「

文化保護地区？」

エミリアが首を傾げて聞く。と、言うのも無理は無いだろう。なんせ辺り一体は単なる密林にしか見えない。自然保護区ならまだしも、周辺には文化的な物は一切見当たらないのだ。それを文化保護区と呼ばれても、イマイチピンと来ない。

「・・・この、密林が、ですか？」

「・・・お前達、そんな事も知らないでここに來たのか？」

トニオがもの凄く深い溜め息を吐く。本当にお前らは教育を受けてきたのか？とか、お前ら実際何歳だよ？とか、何で説明しなきゃなんねえんだ？とか、そう言う心の声が聞こえてくるぐらいに深い

溜め息だった。その溜め息を聞いて、エミリアが少し頬を膨らます。

「駆け出したから仕方ないんですー！　ん、でも文化保護地区とある観光地にしては誰もいないって言うのは不思議だね。船はこんなにいっぱいあるのに・・・。」

そのエミリアの意見を聞いたトニオが、少しニヤリと笑う。

「なるほど、勘は良いみたいだな。」

「さっきあたいが出くわした原生生物もやけに凶暴だったし、多分、奥で何か起こってるんじゃないかな。」

「うーん、だとすると、奥の方に探している人も居るかも知れませんね。」

「なんにせよ、奥に進まなけりや見回りも人探しもできねえしな。」

「え、もしかしてそれ、奥に行く流れ？」

「ええ。まあ、さっきよここつと物足りなかったんでしょ？　なら丁度良いんじゃないかしら？」

「えー・・・取立てなら戦わなくて済むと思ったのに・・・。」

「なら、一人で留守番する？」

「それは寂しいからイヤ！」

「と、言うワケで、私達は奥へ行きますので。それでは。」

「おいおい、ちょっと待てよ！」

そう言ってトニオが奥へと行こうとした私達を呼び止める。

「どうせ同じ奥に行くんだ、一緒に行かねえか？」

「あ、それもそうですね。それでは、よろしくお願い致します。」

「うん、よろしくね。それじゃ、取り合えずカーシュ族の村に向うって事で、良いかい？」

「ええ、お任せします。船を置いて何処に行つたのか分からない以上、それで問題ないですよ。」

「村？ その村までの道のりとかつて分かるの？」

「うん。カーシュ族は各地を転々とする部族なんだ。だからはぐれた仲間が分かるように、文字で目印を残してるんだ。で、その文字をあたいはあらかじめ学んできたから読めて、それを辿れば村まで行けるってワケさ。」

「へっ……どんなのなんだろ。」

エミリアがカーシュ族の文字に若干の興味を惹かれたところで、一向は歩き出す。目的地は取り合えず、カーシュ族の村だ。

第五話「この時間が永遠に続けば良いのに。」（後書き）

へい、反省してます。でもだってこの話にかなりピタンコだったんだもん！と、言う訳で、是非とも聞いてみてください。『SUM41』の『With Me』です。SUM41っぽく無いだとか商業用曲だとか色々意見御座いますが、わっちは好きですよ、こう言うのも。てな具合で今回はここまで。ただ、次回は何時になるかよーっと分からないので、直ぐに来ると思わずに、気長に待っていてくださいまし。ではでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1204t/>

ファンタシースターポータブル2「小さな翼と歩く悪意」

2011年10月10日03時20分発行